特集１：子供のきこえと言葉の発達

徳島大学病院小児言語外来の取り組み

佐　藤　公　美
徳島大学病院小児言語外来言語聴覚士

徳島大学病院小児言語外来は，耳鼻咽喉科の専門外来の一つとして，平成14年４月に開設した。小児難聴外来と連携し，小児耳鼻咽喉科担当の医師３名と共に，難聴児の聴力検査や言語発達検査を実施し，言語発達やコミュニケーションに関する相談を受けている。開設当初は，言語聴覚士１名でスタートしたが，今年度は言語聴覚士４名の体制となり，木曜の午後，予約制で外来を行っている。

平成25年度の小児言語外来の利用者は155名，延べ457名が受診した。155名のうち，初診は77名（50％），再診は78名（50％）であった。

初診時の年齢は０歳～６歳までの乳幼児が54名(71％)と７割を占めるが，学童～青年の相談も３割あった。初診時の主訴は，聴力に関する内容が最も多く42名(55％)，次いで構音が22名（28％），言語が13名（17％）であった。紹介元は，耳鼻咽喉科や小児科，形成外科など医療機関から紹介された児が58名（75％），次いで乳幼児健康診査後の精査のため受診した児が12名（16％），小学校や幼稚園・保育所などの公的機関から受診を勧められた児が６名（８％）であった。

小児言語外来を受診する主訴は難聴，言語発達遅滞，構音障害，吃音など，多岐にわたる。小児難聴外来で医師による聴覚の精査と診察を行った後，小児言語外来で言語発達検査を行い，言語訓練が必要と判断した場合は，当院や近隣の訓練機関で言語訓練を行っている。また，最近では徳島大学病院形成外科と連携し，口唇口蓋裂児の術前・術後の構音・言語評価，言語訓練を行っている。

小児言語外来を受診する児の４割は一側もしくは両側の難聴児であり，難聴の程度に合わせた聴覚補償や聴覚学習を行っている。就学時には地域の学校と連絡をとり，FM 補聴システムの導入や，地域の学校の教諭への指導を行うことも重要な言語聴覚士の役割である。小児難聴外来と連携し，定期的な聴覚管理や言語発達のフォロー，家族支援など長期的に難聴児を支援することが重要である。